

【 特 別 企 画 】

本企画への^{いざな}誘い

特別企画までの経緯

本企画の発端は、第 11 回日本コミュニケーション学会九州支部大会で行われた、日本レトリック研究会のメンバーによるパネルディスカッションである。実は、この企画の編者を務める私自身は私用のために大会を欠席している。しかし、発表要旨を読み、「これは支部大会にとどまらず、より広く公開すべき内容であるに違いない」と直感した。このようないざさか私的な理由ではあるが、この大会中に紀要編集委員長に就任したこともあり、委員長裁量によってこのパネルの掲載が実現したというわけである。とはいっても、第三者による録音テープの掘り起こしではなく、多忙なスケジュールの中、3名のパネリストの方々に改めてご執筆いただき、その結果、紀要にふさわしい読み応えのある論集となった。

先述のとおり、パネリストは CAJ 内に設けられた「日本レトリック研究会」の中心メンバーの先生方である。つまり、お三方は、はるばる東京から九州は沖縄へ、そして、「レトリック」の領域から「異文化」をテーマにした大会へと、地理的・学問的に「越境」されてこられたのだ。おそらくレトリック研究を専門としない研究者にとっては、レトリシャンの語り口や切り口はある種の「異文化体験」であろう。そこで、掲載にあたり「仲介」者が必要でないかをご相談申し上げたところ、何の因果か最終的に私にその役が任されることになった。

むろん、私自身、レトリックの専門家ではない。しかし、自身が依拠してきたパラダイムや方法論等を振り返ってみると、そこには多くの共通部分があるようにも思える。パネリストのテーマを見ても、「差異」、「表象」、「他者」、「死者」、「都市」などは、異文化コミュニケーション研究者の端くれである私の興味を魅きつけ、事実、私が日ごろから好んで読んでいる書物でよく目にする言葉である。そういう意味では、私は、レトリック研究と異文化コミュニケーション研究のあいまいな境界線上にいる（論考を先取りして言えば「灰色の領域」にいる）「雑種」なのであろう。そういうことで、役不足を認識しつつも、これらの度量衡を担保に、その仲介役をお引き受けするに至ったのである。

構成について

パネルの構成にあたり、論考の提示の仕方に関して一言断りを入れておかねばならない。というのも、ここには、レトリック研究の専門家であるパネリストにとっては決して無視することができない rhetorically-sensitive な問題を孕んでいると考えるからである。例えば、仲介者として私が事前に着眼点を設定すると、本来様々な読み方が可能なテキストに対し、私が考える読み方へと読者の読みを収斂してしまう恐れがある。また、ある特定の順番に並べることも、テキストたちが読まれる文脈としての「超」物語を編み出してしまうことになるだろう。

いずれにせよ、多かれ少なかれ、上記のような事態は避けられまい。しかし、ただ生のテクス

トを提示するのでは「仲介」の意味がないだろう。私による積極的なテキスト解釈への介入の責任を引き受けたうえで、本企画では総括における私の論点を明示しやすい仕方で並べ、以下の論考の概要紹介は最低限にとどめることにする。

論考の概要

「コミュニケーションと国際交流」と題されたこのパネルは、大会テーマであった「異文化交流とコミュニケーション」に真正面から取り組んだものである。この「異文化交流」や「国際交流」という用語が時代的にもかなり手垢のついた言葉であるように感じるのは、私だけであろうか。世間ではこれらの語感が持つ異国情緒な雰囲気だけが誇張され、「『外』への憧れ」と「『外』を知らないことへの自嘲」からか、「交流＝善」という前提だけが無意識に受け入れられている。また、研究テーマの性質上、多くの研究者が自ら実践者として交流に深くコミットしており、そのために批判的視座が抜け落ち、ガードが下がってしまう。このようなある意味「馴れ合い」の空気に対し、この野心的なパネルは、「異文化」や「国際」を頭文字に持つ現象に興味を抱くコミュニケーション研究者が一度は立ち戻るべき本質的な問いを提示し、独自の分析を加えている。

私はこれらの論考を読む中で、板場氏の発表を現在の「国際交流」観への問いかけとして、藤巻氏と柿田氏の発表をより具体的な分析として位置づけた。パネルの要旨に、「われわれはそもそも文化の差異が交流依然に存在していた与件と考えるわけにはいかないのである」という文面があったが、この見識は3者の語りの中に脈々と流れている。そして、ここを起点として、国際交流に従事する者、そして、コミュニケーション研究者に対し、様々な問いかけがなされている。

板場氏は、異文化交流に関する題目で発表を予定されていたが、事情により参加を断念されている。今回無理を承知で書き上げていただいたのが、「国際文化交流は国際紛争根絶の手段か？」という問題提起の論考であった。それは、「国際文化交流が欠如するから国際紛争の可能性が増すのではなく、国際紛争が欠如するから国際交流を促進できるのではないか」という、我々の常識を覆す、挑戦的な問いである。この問いにより、私たちが常識的に考える、「『異文化を背景とした人々』がコミュニケーションによって目の前の『差異』を埋める」という捉え方に、板場氏は疑問を呈す。というのも、本来、異文化交流の場にいる我々こそが文化のエージェント、つまり、文化を支える存在なのであるから。氏の語りは、善意をもって国際交流に参加されている方々を糾弾するものでは決してない。むしろ、現在の枠組みの限界を露呈し、よりよい国際交流を模索する建設的な「倫理的問い」なのである。

藤巻氏は「ネクロポリスにおける偶有性とは アメリカにおける『アルメニア人虐殺』の『承認を求める政治』によせて」と題し、国際交流とコミュニケーションに対して都市が果たす役割を論じている。特に、ホロコースト記念博物館がメディアとして機能し、「国際交流」や「多文化主義」という名のもと、アメリカが自らの政治的正当性を獲得しているのではないかと懸念している。そこでは、ホロコーストにおける被害者と加害者が固定化され、「死者」や「被害者」の声は政治的に利用される。「国際交流」が持つ政治性を顕在化させる、一步踏みこんだ論考である。

柿田氏は、「主体創出のコミュニケーション空間 イソクラテスの『民族祭典演説 (Panegyricus)』」において、紀元前のギリシアに舞台を移し、イソクラテスによる「民族祭典演説」を通して「ギリシア人」という主体がいかにか言説的に表出せしめられるか、主体創出の政治的磁場における実践を詳細に分析している。時代はかなり遡るものの、現在の「異文化交流」に

において当然のごとく前提とされる「～文化」や「～民族」が、実は実体的な存在ではなく、むしろ言語によってイデオロギー的に編み出されたものであることが明らかとなる。

このように全体を読んでいくなれば、「国際交流」や「異文化交流」とは、普段考えられているほど平和的ではなく、それは時に政治性を秘め、それ自体がイデオロギー的实践であり、現在それに対する倫理的問いが不問にされている、という事態が現れてくるであろう。異文化コミュニケーション研究者は、これら3つの論考を通して、「ならば、私たちコミュニケーション研究者は、国際交流に対してどのような構えで臨むべきなのだろうか」という実践的問いを手に入れるのだ。

文責 吉武正樹（福岡教育大学）